

A-76 味覚感度と食品・図形に対する嗜好の調査研究

千葉大教育 ○松下幸子 農林省食研 西丸震哉

目的 味覚感度と嗜好は食生活に影響する重要な因子である。千葉県内において児童の味覚感度、食品・図形に対する嗜好に、地域による差異が見られるかどうか、また、味覚感度と嗜好にはどのような関連があるかを知るために調査研究を行なった。

方法 千葉県内の都市、農村、山村、漁村の4地域から小学校7校を選び、高学年児童男子164名、女子151名を対象として調査を行なった。味覚感度の調査には味覚感度テスト用紙を用いた。食品の嗜好調査は、副食物として用いられる主要食品16品の絵を、公平に比較されるように4枚/組にして組み合わせを変えて20回提示する方法により、「最も好きなもの」、「つぎに好きなもの」、「好きでも嫌いでもないもの」、「嫌いなもの」の4段階に嗜好の程度を記入させ、配点法によって嗜好度を算出した。図形については食品に関連のある16の図形を選び、食品の場合と同様の方法で調査し、さらにその図形から連想するものについても記入させた。

結果 味覚感度については、地域別、男女別による有意の差は認められなかったが、僻地の山村の児童は全般的に正解率が高かった。食品の嗜好は全地域の平均値による順位を見ると、好まれてゐるものは、果物、豆腐であり、嫌われてゐるものは、レバー、玉ねぎであった。また、地域間には顕著な差が見られず、むしろ男女の嗜好度に差が見られた。図形に対する嗜好では、複雑な形より単純な形が好まれ、食品を連想しやすい形の嗜好度が高く、地域間よりも男女間に嗜好度の差が認められた。また、全般的に見て味覚感度の高い者は食品・図形に対する嗜好度も高い傾向が見られた。